

1971年

前年に訪中した中島健蔵理事長の毛主席との会見、周総理との会談が、この年三月に名古屋で開催された第三十一回世界卓球選手権大会への中国チーム参加の大きな推進力となった。大会後に急遽訪中したアメリカ卓球選手団を周総理が接見、そして、七月のキッシンジャー訪中、十

月の国連総会における中華人民共和国の議席回復、翌七二年二月のニクソン訪中、九月の日中国交正常化実現へと歴史は大きく転換していった。後に、この一連の活動・交流が「ピンポン外交」と称されるようになった。ニクソンシヨックで世界的に株価が暴落、中国では林彪事件が生じた。

（七一年の主な交流）

◎1月 後藤鉦二日本卓球協会会長一

行訪中、北京において、日本卓球協会、日本中国文化交流協会、中国卓球協会、中国人民対外友好協会の間で会談紀要に調印。

◎2月 日中国交回復国民会議が発足、中島健蔵当協合理事長が議長に。

◎3月 当協会が主催し東京で松山バレエ団「白毛女」公演。中国卓球選手団（趙正洪団長ら総勢六十名）来日、符志行、魯挺、宋中ら体育界指導者、

コーチの徐寅生、莊家富、男子選手の莊則棟、李富榮、梁戈亮ら諸氏だけでなく、王晓雲、唐家璇（現國務委員）、王效賢、周斌ら中国の外交、対日問題の責任者諸氏が参加。日中文化交流協会創立十五周年記念・中国卓球代表団歓迎レセプションを開催。

◎4月 名古屋での世界大会参加の中国選手団が引き続き日中交歓卓球大会に参加、当協会、日本卓球協会が主催。日本橋・東急百貨店で中国卓球選手団来日記念「中華人民共和国写真と物産展」、当協会と日本国際貿易促進協会主催。

◎6月 訪中日本文化界代表団（白石凡団長、宮川寅雄副団長、白土吾夫秘書長、藤堂明保、尾崎秀樹、野村浩一、佐藤祥子の諸氏）訪中。有楽町・読売ホールで映画「紅色娘子軍」試写会、当協会と読売新聞社主催。

◎7月 東京の共立講堂で「盧溝橋事件三十四周年 日中友好・日本軍国主義反対 七・七大集会」、日中国交回復国民会議主催、中島健蔵氏ら講演。後藤鉦二日本卓球協会会長一行訪中。東京・朝日講堂で映画「智取威虎山」試写会、当協会と朝日新聞社主催。

◎8月 日中交歓ジュニア卓球選手団（後藤淳団長、同参観員（山本弥一郎団長、随行者（田畑光永、釜井卓三らの諸氏）訪中。松村謙三氏の葬儀に列席するため、王国権中日友好協会副会長が来日、中島健蔵理事長と懇談。

◎9月 松山バレエ団訪中公演（清水正夫団長、松山樹子副団長ら）、北京



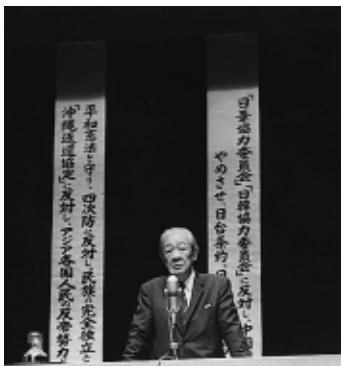
名古屋で開かれた第三十一回世界卓球選手権大会に中国が参加した。「日本卓球協会、日中文化交流協会、中国卓球協会、中国人民対外友好協会の会談紀要」に基づき実現したものである。この大会を舞台にいわゆる「ピンポン外交」が展開され、日中国交正常化、米中関係正常化に大きな役割を果たした。協会はレセプションを開催し、六十名の大型中国卓球代表団を歓迎するとともに協会創立十五周年を祝った

日本卓球チームの歓迎を受ける（左から）選手の莊則棟、李富榮、コーチの王志良、徐寅生ら中国卓球チームの諸氏

一九七一年三月二十八日 愛知県体育館

ハリソン米国卓球チーム副団長（左）と握手を交わす魯挺副団長（右）。中央は西園寺公一氏。中国は建国後初めてアメリカ卓球選手団を北京に招請、中米関係正常化への契機となった

一九七一年四月二十八日 東京・椿山荘



日中国交回復国民会議

日中国交正常化の気運が高まる中、日中国交回復国民会議の主催で開かれた盧溝橋事件34周年記念集会であいさつを述べる中島健蔵同会議議長

——1971年7月7日 東京・共立講堂

羽田空港で中国卓球代表団を見送る
(前列右から)中島健蔵理事長、村岡久平、後藤鉦二日本卓球協会会長、白土吾夫の各氏

——一九七一年四月三十日



△上△日中文化交流協会代表団の熊井啓氏(左)は、撮影所を見学し、「中国は、近い将来、質量ともに巨大な映画生産国になるだろう」と予言した。王曉雲氏とともに北京中山公園で

——一九七一年十月



文化各界20名からなる大型の日中文化交流協会代表団が三週間にわたり訪中した。広州聾啞学校を参観する団員の加藤周一氏(左)。氏は帰国後『中国往還』を著し大きな反響を呼んだ

——1971年9月



1957年から、外国との交易の拠点として重要な役割を果たしている広州交易会を参観する日中文化交流協会代表団の吉村公三郎氏(左)と三留理男氏

——1971年10月

一九七一年十月二十五日、二十二年間にわたる虚構が音を立てて崩壊し、国連における中国の正当な代表権が回復した。それも、七十六対三十五という、文字どおりの大差。七一年は、国連の歴史が終わった記念すべき年で、国連での中国復帰に反対の立場をとりながらも「微速前進」を開始した日本の「官」が、もはや「微速」ではいられなくなった年でもある。

一九七二年の日中国交正常化は、外因の要素が強いように見えるが、外因は内因を通じて作用するという法則はこの場合も当たっている。

(九十九)

などで「白毛女」「沖縄の五人娘」など上演。日中文化交流協会代表団(団長・中島健蔵理事長、中島京子、宮川寅雄、木村伊兵衛、杉村春子、白土吾夫、香川峯雲、菅野長吉、吉村公三郎、香坂順一、小山西宏、安藤彦太郎、加藤周一、徳間康快、長島健、下中邦彦、熊井啓、三留理男、佐藤純子、木村美智子の諸氏)訪中。

◎10月 北京でのアジア・アフリカ卓球友好招待試合に日本代表団(後藤鉦二団長)が参加。

◎12月 東京・読売ホールで「中国ハリ麻酔映画と講演のつどい」、読売新聞社主催、当協会、中国医学研究会後援。東京・朝日講堂で「最近の中国を語る」講演と映画の会、当協会と朝日新聞社主催。

1972年



日中国交正常化が実現 日本政府と中華人民共和国政府は、1972年9月29日、共同声明に調印し、日中間の戦争状態の終結、日中国交正常化の実現を宣言し、外交関係を樹立した。共同声明に署名をする田中角栄首相と周恩来総理

周恩来総理(左)は、日中国交正常化祝賀会で、協会代表団の高峰三枝子氏(右)に白菊を一輪贈った。高峰氏は、人生の中で最も幸せな一瞬だったと当時を回顧している

一九七二年十月十三日 北京・人民大会堂



七月に佐藤内閣が総辞職、田中内閣が誕生した。国内世論の高まりという内因と、前年の中国の国連復帰や二月のニクソン訪中という外因により、日中国交正常化への

気運は一気に高まっていた。九月に田中首相、大平外相が訪中、両国政府による共同声明が発表され、両国間の不正常な状態に終止符がうたれた。日中国交正常化が実現したのである。前年の「ピンポン外交」は、国交正常化へ向けての潮を確固たる流れにしたが、

日中国交正常化に至る雰囲気をさらに盛り上げ、後に「舞劇団外交」と称されたのが七月の中国上海舞劇団の来日であった。国内では沖縄返還、浅間山荘事件、日本列島改造論、中国では長沙の馬王堆漢墓の発掘が話題となった。

藍田、西川寧、梅舒適、古谷蒼韻、松井如流、宮本竹選、村上三島らの諸氏。◎5月「延安の文学・芸術座談会における講話」発表三十周年記念講演と映画の会(東京・有楽町の朝日講堂、当協会、朝日新聞社主催)。

◎七二年の主な交流

◎3月 北京で当協会と日本卓球協会が中国側と会談コミュニケーション発表。北京で当協会と日本バレーボール協会が中国側関係団体と会談紀要に調印。

◎4月 テレビ朝日特別テレビ取材班(館公明制作局長ら五名)訪中。名古屋で「日本・中国文化交流展」開幕、中日新聞社など主催、当協会など後援。毛主席の「延安の文学・芸術座談会における講話」発表三十周年を記念し「毛主席詩詞書展」を東京・日本橋高島屋を皮切りに日本各地で開催、当協会、日本書道文化連合会、日本書道連盟主催。同展の出品者は青木香流、青山杉雨、浅見寛洞、飯島春敬、今井凌雪、植村和堂、宇野雪村、大石隆子、香川峯雲、金子鶴亭、近藤撰南、佐々木泰南、田中凍雲、種谷扇舟、手島石卿、戸田提山、殿村

◎6月 九州民間放送友好訪中団訪中、高野信九州朝日放送社長を団長、当協会の白土吾夫氏を秘書長に、小林幸三郎(RKB毎日放送)、野間浩(テレビ西日本)、鈴木従道(長崎放送)、深水六郎(熊本放送)、好木卓蔵(大分放送)、立元郁夫(宮崎放送)、小原政雄(南日本放送)、溝口勇夫(九州朝日放送)らの諸氏で編成。「白石石展」(東京・新宿の伊勢丹)開幕、当協会主催。

◎7月 中国上海舞劇団来日、孫平化団長はじめ唐家璇、呉從勇ら諸氏の団幹部、男性舞踊手三十三名、女性舞踊手三十九名、コラス二十名、オーケストラ五十七名、舞台関係者など一行二百八名、当協会と朝日新聞社の招きにより、東京など各地でバレエ「白毛女」「紅色娘子軍」などを公演。平凡社が「天寿亨鄭氏注論語」日本語版を刊行。

◎8月 来日公演で大成功を収めた中国上海舞劇団が日本航空と全日空の特別機で帰国、羽田から上海へ直行、日本の航空機が中国に入れたのは戦後初で、日中文化交流協会代表団(中島健蔵理事長、中島京子夫人、宮川寅雄、白土吾夫、白石凡各常任理事)が同乗、在京新聞・テレビ各社の随行者も特別機に同乗。上海市ジュニアサッカ



協会と朝日新聞社が招請した208名の上海舞劇団は、三便の飛行機に分乗して羽田空港に到着、空港ロビーには二千人を超える歓迎の人波ができた。中央は孫平化団長。一行による「舞劇団外交」は、前年の「ピンポン外交」に続いて、日中国交正常化を急ピッチで推し進めた

——1972年7月10日 東京

〈右〉7月、上海舞劇団は、東京、大阪などで「白毛女」「紅色娘子軍」を上演、日中友好の気運を盛り上げた



日中文化交流協会代表団は、帰国する上海舞劇団とともに日中間の直行臨時第一便で上海に到着、その後、北京を訪れた。健康を回復した王国権会長(中)を見舞う中島健蔵理事長(右)、白石凡常任理事

——一九七二年八月



―選手団(張振亜団長)

が当協会と横浜市の招きで来日。ジュニア卓球選手団(後藤淳団長 訪中。「馬王堆漢墓写真速報展」(日本橋高島屋 開幕、当協会、朝日新聞社主催。当協会、朝日新聞社が主催し「日中文化交流協会代表団帰国講演会―中国・長沙の古墳」(朝日講堂)を開催。

◎9月 当協会、朝日新聞社、東方書店が主催し「中国長沙漢墓写真展」(東京・日本橋高島屋)を開催。

◎10月 当協会などが主催し「慶祝中華人民共和國成立二十三周年中国切手展」(東京・松坂屋銀座店)。日中文化交流協会代表団(宮川寅雄団長、藤堂明保副団長、白土吾夫秘書長、杉村春子、武蔵川喜偉、高峰三枝子、團伊玖磨、藤井治夫、石澤秀二、佐藤純子、内海邦夫の諸氏)訪中、北京での日中国交正常化祝賀レセプションで周恩来総理と会見。

◎11月 中国青年卓球選手団(莊則棟団長)来日、当協会と日本卓球協会の

主催で各地で日中交歓卓球大会。

当協会はこの年、上海舞劇団を招請することにしていたが、それが国交正常化に一定の役割を果たすことを確信していた。

佐藤内閣が続いても続かなくても、正常化は目前に迫った歴史の必然であると感じていた。総員二百余名の大編成であるから、劇場、ホテル、国内交通の予約も七一年のうちに開始した。しかし、七一年末までに、訪日予定どおりとの確認は来なかった。七二年の一月末まで待った。来ない。二月末まで待った。来ない。これ以上、劇場とホテルなどをおさえておくことは通常できない。それでも、多額の取消料を覚悟しておさえつけていた。三月に入ってから、ようやく「六月に訪日する」との一報が入った。国内政局の動向を推定し、「七月十日に来日された」と打電した。七月七日に田中内閣成立、十四日の初日には三木武夫、中曽根康弘などの閣僚が出席、帰国前には田中首相と孫平化団長との非公式会談が実現、九月二十九日に日中国交正常化が成った。有楽町の事務所には数え切れぬほどの祝い酒が届いた。

初めて買ったテレビで北京からの映像を見ながら小躍りして喜ぶ事務局員に、中島理事長は「当協会の前史は終わった、これから本史が始まる」と語った。

(九十九)

1973年

当協会は、朝日新聞社から一九七二年度『朝日賞』を受賞した。「創立以来、困難な状況の下で日中両国間の文化交流の中心的機関として活躍、学術・芸術・スポーツなどを通じて両国人民の友好を推進し、国交の回復に多大の貢献をした」ことにより贈られたものである。一月十六日、朝日講堂で授賞式が行なわれ、廣岡知男朝日新聞社社長から中島健蔵理事長

に賞状が贈られた。大相撲の訪中公演、廖承志氏を団長とする五十四名からなる中日友好協会代表団の来日、中国出土文物展の開催など、規模の大きい行事が次々と実現した年であった。ドルが急落、一ドル二百六十四円に。中国では鄧小平氏が副総理へ復権した。

△七三年の主な交流

◎1月 「定陵地下宮殿宝物展」(東京・

西武百貨店) 開幕、読売新聞社、当協会など主催。当協会は日本スケート連盟、日本アイスホッケー連盟、日本バドミントン協会とそれぞれ協力、北京で中国側関係団体と会談紀要に調印。当協会が「朝日賞」受賞。

◎2月 日本文化界代表団(土岐善麿団長、戸板康二副団長、白土吾夫秘書長、井手雅人、徳田六郎、小松久麿、瀬戸内晴美、田中信昭、篠弘、原信之秘書の諸氏) 訪中。

◎3月 「北斎展」が北京・中国美術館で開幕、当協会、日本経済新聞社、中国人民対外友好協会が協力して開催、同展代表団(水田三喜男団長、圓城寺次郎副団長、白土吾夫、青木進三朗、松山邦夫、橋本博英、木村美智子秘書の諸氏) が開幕式に出席。日本出版界友好訪中団、下中邦彦平凡社社長を団長に、相賀徹夫(小学館)、安井正幸(東方書店)、杉浦俊介(日本出版販売)、石川度治(東京出版販売)、服部敏幸(講談社)、岡本美雄(ひかりのくに)、椿孝雄(医学書院)、山浦喜三夫(ほるぷ出版)、神戸祐三(大明堂)、南條正男(共立出版)、山下辰巳(徳間書

——1973年4月13日 上海

日中国交正常化記念の慶祝行事として举行された大相撲中国場所は、日本相撲協会と日中文化交流協会が実施したものである。力士は横綱の北の富士、琴桜はじめ総勢117名という豪華な顔ぶれで、北京と上海で6回举行され、いずれも超満員であった

周恩来総理、葉剣英副主席は、大相撲北京場所の千秋楽を観戦した。取り組みを前に武蔵川喜偉団長(左)と握手を交す周恩来総理(右)。武蔵川氏(日本相撲協会理事長)は、前年、日中文化交流協会代表団に加わり訪中、その時も周恩来総理と会見している

——一九七三年四月八日



店)、石川晴彦(主婦の友社)の諸氏が訪中。

◎4月 日本相撲訪中団訪中、武蔵川喜偉日本相撲協会理事長を団長、宮川寅雄当協会副理事長を副団長兼秘書長に、春日野清隆、二子山勝治、時津風勝男などの親方、及び横綱、幕内、十両力士を含め総勢百十七名が参加、北京と上海で六回举行、周恩来総理が北京場所の千秋楽を観戦。日本サッカー協会と当協会は中国側関係団体と会談紀要に調印。中日友好協会代表団(団長・廖承志中日友好協会会長) 来日、楚図南、榮毅仁、張香山、孫平化、華羅庚、謝冰心、林麗韞、李季、張瑞芳、古元、陳祖德など各界の著名人士五十四名で編成、当協会の白土吾夫事務局長が日中関係の団体で構成された歓迎実行委員会の事務局長に。当協会と日本経済新聞社が主催し「中華人民共和国河南省画像石・碑刻拓本展」を東京・渋谷の東急百貨店で開催。

◎5月 日本写真家訪中団(木村伊兵衛団長、渡辺義雄副団長) 訪中。

◎6月 「中華人民共和国出土文物展」が、上野の東京国立博物館で開幕、当協会と朝日新聞社などが主催、春秋時代から元代に至る貴重な文物二百数十点を展覧、王治秋国家文物事業管理局局長を団長に、宿白、史樹青、郭芳為らの諸氏からなる代表団が来日、会期中に皇太子殿下、美智子妃殿下(現天皇、皇后両陛下) が同展を鑑賞、引き続き京都国立博物館で開催。「現代日本の伝統工芸展」が北京の民族文化宮



朝日賞を受賞 朝日新聞社から「長年にわたる日中文化交流への貢献」により贈られた。廣岡知男社長(左)から、賞状を受け取る中島健蔵理事長

——1973年1月16日 東京・朝日講堂



国交正常化を記念し、当協会と朝日新聞社、東京国立博物館の主催で中国出土文物展が開催された。東京展の開幕式に出席した田中角栄首相を案内する王治秋中国国家文物事業管理局局長(右一)。会場を訪れた海音寺潮五郎氏は「呼吸も忘れるほどに感動した」と述べている

——1973年6月8日 東京国立博物館



日本書道界に初の統一組織全日本書道連盟が結成され、その役員による日本書道代表団が訪中。当協会と中国人民対外友好協会との協議に基づき実施されたもの。西安での書会で揮毫する青山杉雨氏(左二)を囲む中村梅吉団長(右二)、金子鷗亭(右一)、飯島春敬(左一)の諸氏

——1973年11月10日 陝西省博物館

日本文化界代表団が訪中。米寿を越え、元気に帰国した協会顧問の土岐善麿団長(右二)、戸板康二副団長(右一)、白土吾夫秘書長(左二)、井手雅人(右三)、瀬戸内晴美(右四)の諸氏

一九七三年三月十四日 羽田



で開幕、主催が当協会、国際芸術見本市協会など。代表団(麻生良方団長、松田権六副団長、白土吾夫副団長兼秘書長)が訪中。瀋陽、広州、上海でも同展を開催。

◎7月 当協会と日本体操協会は北京で中国側関係団体と会談紀要に調印。金原出版代表団(内山勇次社長、金原秀雄専務、杉浦俊介日販副社長、石川博日販貿易課長らの諸氏)訪中、金原出版は創業百年を記念し、同社出版の学術医学図書七百点を中華医学学会に贈呈。日本体育協会代表団(河野謙三団長、田畑政治、青木半治、柴田勝治、山口久太らの諸氏)訪中。

◎8月 中国出版印刷代表団(嚴文井団長、王仿子副団長)来日。中国科学院植物学工作者代表団(崔激団

長)来日。

◎9月 日中文化交流協会代表団(宮川寅雄団長、白土吾夫副団長兼秘書長、宮川チトセ、増田渉、谷口鉄雄、林原龍吉、慶田八郎、網干善教、安永寿延、戸室道子秘書の諸氏)訪中。

◎10月 中国体育代表団(李夢華団長、朱仄副団長)来日。

◎11月 日本書道代表団(中村梅吉団長・全日本書道連盟理事長、香川峯雲副団長、白土吾夫秘書長、村上北海、金子鷗亭、飯島春敬、青山杉雨、村上三島、梅舒適、田中凍雲、中村靖秘書、木村美智子秘書の諸氏)訪中。中国生物科学者代表団(童第周団長)来日。

◎12月 日本アイスホッケー選手団(山添義雄団長)訪中。

大相撲訪中挙行の準備は、前年の初頭から国交正常化を見越して開始された。日本相撲協会の武蔵川喜偉理事長から協力を要請された協会は、万難を排してこれを実現させようと考えた。武蔵川・白土会談が何回も行なわれ中国側との折衝が始まった。受けて立ったのは廖承志中日友好協会会長であった。それは国交正常化記念行事にふさわしいものであるか、から始まって、会場となる体育館は土と湿気を嫌うがそこにどうやって土俵を築くか、土俵の重さプラス瞬間圧力は一平方センチあたり何キログラムになるか、床はその重みに耐えられるか等々、生活全般に至るまで、白土事務局長の説明が続いた。(九十九)

1974年

田中首相が辞職、三木内閣が成立した年であった。日中の定期航空路が開設され、両国間の往来が飛躍的に発展した。当協会も初めての中国オーケストラ中央楽団の招請



一九七四年「漢唐壁画展」が北九州美術館で開幕し、十万人余が鑑賞した。翌年の一月、東京展で関野雄東京大学教授(右二)の案内で熱心に鑑賞される皇太子殿下と浩宮殿下(当時)。井上靖氏、白土吾夫氏らが同席した

——一九七五年一月十一日 東京 日本橋高島屋

のほか、微生物、応用植物学、海洋学、水産学、海洋開発など多彩な交流を展開した。創立以来の役員で学士院院長を務めた南原繁氏と写真家の木村伊兵衛氏が逝去したのもこの年。

七四年の主な交流

◎1月 中国マラソン視察代表团(趙愈廷団長) 来日。
◎2月 奈良市代表团(鍵田忠三郎団長・市長) 訪中。奈良市と西安市が友好都市に。



九月二十九日、日中定期航空路が開設、日中文化交流協会代表团の中島健蔵団長は日本航空の一番機に搭乗、その他のメンバーは、中国民航の一番機に搭乗し訪中した。羽田空港を出発する(右前から後へ)有吉佐和子、武蔵川喜偉、井上靖、島野武、(左前から後へ)安田順恵、白土吾夫秘書長、佐藤純子、中島京子、宮川寅雄副団長の諸氏

◎3月 日本書道家訪中団(香川峯雲団長、種谷扇舟秘書長、木村美智子秘書)一行十九名訪中。圓城寺次郎日本経済新聞社社長と白土吾夫氏ら訪中。

◎4月 日本出版編集者訪中団訪中、団長に徳間康快徳間書店社長、八木寛(東方書店)、長谷川泉(医学書院)、海老原光義(岩波書店、清原美彌子(主婦と生活社)、御筆政則(主婦の友社)、市川富雄(小学館)、土井庄一郎(築地書館)、松林保(講談社)、山下辰己(徳間書店)、馬場一郎(平凡社)、池田克哉(潮出版社)らの諸氏。『中華人民共和国河南省碑刻画像石』が共同通信社から刊行、中国国家文物事業管理局と当協会の協議により実現。日本エスプレント代表团(問田直幹団長、磯部幸子副団長、伊藤栄蔵、徳田六郎ら諸氏)が中華全国世界語協会の招きで訪中。

◎5月 日本印刷代表团が訪中、相賀徹夫小学館社長を団長、澤村嘉一凸版印刷社長を副団長に、大橋貞雄(共同印刷)、辻隆之進(日本写真印刷)、下中直也(東京印書館)、山口洋一(大日本印刷、秋山文夫(写研)、中谷明(東京コンピュータ・タイプ)らの諸氏。

◎6月 日本ライフル射撃選手団(安斉実団長 訪中。『龍門造像題記』が中央公論社から刊行、中国国家文物事業管理局と当協会の協議により実現。

◎7月 中国体操選手団(陸文春

団長) 来日。中国上海曲技団(林徳明団長)が当協会、横浜市、大阪市などの招きで来日、八都市で公演。中国庭球選手団(王享年団長) 来日。日本考古学者代表团(宮川寅雄団長、関野雄、町田甲一、岡崎敬、鈴木嘉吉、土居淑子、高橋紘、木村美智子秘書の諸氏)訪中。応用植物学者代表团(奥田東団長・京大元総長、三井哲夫、高橋万右衛門、角田重三郎、中田和男、今関英雄、鈴木昭憲、上遠恵子、今田好彦の諸氏) 訪中。

◎8月 日本体育学研究者代表团(前川峯雄団長・日本体育学会副会長) 訪中。

◎9月 全国市長会代表团(渡邊浩太郎団長・新潟市長、安東玉彦副団長・大分市長、白土吾夫秘書長、河合陸郎豊橋市長、羽藤栄市今治市長、北川実夫府中市長、岡良一金沢市長、中井一郎小田原市長、菊地良三宮古市長、宇治田省三和歌山市長、米田忠雄千歳市長、幸島禮吉幹事、山浦誠、佐藤祥子、横川健各秘書の諸氏) 訪中。「故宮博物院秘蔵・中華人民共和国明清工芸美術展」(東京、日本橋三越)開幕、当協会、日本経済新聞社など主催、同展開幕式参加中国代表团(呉仲超団長・故宮博物院院長) 来日。中国少年武術代表团(魏明団長) 一行四十二名、当協会の招きで来日、東京、金沢など七都市で公演。日中文化交流協会代表团(中島健蔵団長、中島京子夫人、宮川寅雄副団長、白土吾夫秘書長、島野武、井上靖、武蔵川喜偉、有吉佐和子、佐藤純子、安田



西安郊外張家坡の車馬坑(西周時代)を熱心に見学する日本考古学者代表団の宮川寅雄団長(右二)と団員の関野雄(左一)、岡崎敬(右一)、土居淑子(左二)の諸氏

——1974年8月



「故宮博物院秘蔵・明清工芸美術展」を東京はじめ五都市で開催 故宮博物院の収蔵品が海外で公開されるのはこの時が初めてであった。呉仲超故宮博物院院長(右)の案内で展示品を鑑賞される三笠宮崇仁殿下

——1974年9月14日 東京・日本橋三越本店

中国中央楽団が海外初公演 当協会、NHK、読売新聞社の招きで来日し、各地で公演した。公演の成功を喜び合う(前列左より)美濃部亮吉都知事、中島健蔵理事長、藤山愛一郎顧問、陳楚中国大使、林麗韞団長、小野吉郎NHK会長、原四郎読売新聞社副社長

——一九七四年十一月五日 東京



順恵の諸氏)が日本と中国の一番機で訪中。◎10月 中国中央楽団来日、一行は林麗韞氏

を団長に、指揮者の李德倫、ピアノ奏者の殷誠忠を含む八十七名、ピアノ協奏曲「黄河」などを演奏、当協会とNHK、読売新聞社の招聘。中国科学院

ピアノ協奏曲「黄河」を演奏する中国中央楽団(指揮 李德倫氏、ピアノ・殷誠忠氏)

——一九七四年十月 東京・NHKホール



微生物視察組(閻遜初組長・微生物研究所教授)一行六名来日。

◎11月 「中華人民共和国漢唐壁画展」北九州市美術館で開幕、当協会と北九州市主催、同展代表団(王治秋団長・

国家文物事業管理局局長、郭芳為、劉炳森、金鳳吉通訳の諸氏)来日。同展は引き続き東京、大阪でも開催。日本

海洋学・水産学、海洋開発交流訪中団訪中、佐々木忠義東京水産大学学長を団長、西脇昌治東京大学海洋研究所所

長を副団長に、松石秀之大林組海洋開発室長はじめ水産庁、三井海洋開発、

住友海洋開発などの第一線の研究者、学者十四名で編成。

◎12月 中国アイスホッケー選手団(趙向団長)来日。

「上海空港、快晴、東の風六メートル、薄いかすみ、視界十キロ以上。日航機は八千五百メートル、全日空機は九千五百メートルで飛行プランどおり進入せよ」一九七二年八月十六日午前八時、上海空港管制塔からの声が羽田の運輸省東京航空局に飛び込んできた。女性の美しい英語である。戦後初めての日中直行便の主役、上海舞劇団の一行二百余人と、当協会代表団五人などが、日航機と全日空機に分乗し、東京から上海へ直接飛んだのは一九七二年のこと。それから二年後の七四年九月二十九日に定期航空路が開設され、日中間の往来は香港経由の煩から解放され、大きく

発展した。(九十九)